

「天地到处有我師」
—『植民地の腹話術者たち』、その前後—
“We can get teachers wherever we are”:
VENTRILOQUISTS and my personal history of before and after

金 哲

KIM CHUL

延世大学校名誉教授

Yonsei University, Professor Emeritus

Quadrante, No.20 (2018), pp.75-83.

拙著『腹／複話術師たち』の日本語版『植民地の腹話術師たち』刊行を機に、2017年7月に東京外国語大学で開かれた書評会後の会食の席で、何か少し書いてくれという要請を、尊敬する岩崎稔・米谷匡史の両氏から頂き、あれこれと悩んでいたところ、ちょうど翻訳者の渡辺直紀氏が「何でも自由に、私的な話でもいいから…」と激励してくれたので、勇気を出してこの小文を始めることにした。実は、「私的な話」を書いて発表するのは生まれて初めてである。作家たちはいつもやっていることだが、私としては不慣れなことこのうえなく、よって、この小文がどう展開するかは、これを書く自分自身もとても気になるし興味深い。はたしてどこまで書けるだろうか…。

◇ ◇ ◇

自らを「学者」と呼ぶのはなんだか面映く、顔が火照るような気がするので、私はできれば「研究者」という呼称を使いたい。この語は、「学生」という言葉と似た印象を与えるので気に入っている。特に謙遜しようというわけではなく、事実そうなのである。私は1970年に大学に入学したが、入学と同時に直面したのは、朴正熙政権が全国すべての大学生に強要した軍事訓練、すなわち「教練」への反対デモであった。初めての学期を新入生気分^{バク・チョンヒ}に浮き立って存分に過ごし、成績不良の「学事警告」を受けたくせに、デモ行列の後について、催涙弾や小石が乱舞するキャンパスを行き来して

いたら、かろうじて進級はしたものの、教室で講義というものを聞いたことがほとんどなかった。ときどき出席はしたが、新入生特有の生意気さが先立って、「聞くに足る講義が一つもない」という高慢さを発揮しながら、外国小説で読んだデカダンの真似事をするのがせいぜいだった。

デモはより一層激しくなり、ついに朴正熙政権が「衛守令」という、見たことも聞いたこともない奇怪な法令を発動して、大学構内に戦車部隊が進駐し、大学の門を閉鎖するということが起こった。そのとき私は大学の放送局で仕事をしていたが、文科大学最上階の狭く薄暗い放送室に、陸軍大佐の階級章をつけた男が突然押し入ってきて、「今から本官がこの場所を接收する。学生たちは全員、建物の外に出て行きなさい」と、何か戦争映画から飛び出してきたかのように号令した光景が、今でも脳裏に深く焼きついている。親しい友人らが学校から除籍となって軍隊に引っ張られていき、私はそのとき除籍や徴集は免れたが、教練の受講を拒否した学生のリストに入っていたので、望んでもいない徴兵身体検査を受けた。いざという時に、いつでも軍隊に引っ張っていけるのだという警告であった。

それは始まりに過ぎなかった。「衛守令」の翌年の1972年に、いわゆる「十月維新」が宣布された。大学の門が強制的に閉鎖され、大学の運動場に軍隊の臨時テントが場を占めるのは、私が大学生だった時期にほとんど習慣的で規則的なこととなった。大学の4年間、完全に授業が開講された学期



は、おそらく 1、2 回ぐらいではなかったか。私がいつも自分自身を「制度教育を受けていない独学者」のように感じるのは、そのような理由からであろう。勉強をしたいという情熱は強かったが、何をどうすべきかを、じっくり学んで身につける機会はまったく持てないまま大学を卒業した。

就職のようなことはまったく考えていなかったもので、深く考えることもなく大学院に進学した。大学院といっても変わったことはなかった。景気がいい時だったので、大学院に進学する学生もほとんどおらず、3、4 名の専攻の学生たちが、学部時代から顔見知りの教授と雑談のような話を交わすのが授業のすべてである場合もあった。自身の無能と不誠実は隠し、環境のせいだけにすると言われても返す言葉がないが、1970 年代の韓国の大学のアカデミズム、特に私が専攻した韓国現代文学の学問的蓄積が、きわめて憐れな水準であったというのは、さまざまな面で豊かでなかった時代に孤軍奮闘した、先輩世代の労苦を無視する傲慢さの発露であるとしても、ある程度は自分自身の体験にもとづいた感覚である。

とにかく、そのような大学院生活もようやく 1 学期を終えた時、私は結局、維新反対のデモにかかわって逮捕され、大学から除籍となり軍隊に徴集された。だが、徴集されて訓練所で正式の入隊を待っている間に、再び逮捕されて「大統領緊急措置 9 号」の違反事犯となり、ソウルの陸軍本部の監房に服役することになった。それから 1 年近い時間を、在日朝鮮人の徐勝氏が酷い拷問に勝てず、自ら石油ストーブをかかえて焼身自殺を試みようとした、あの悪名高き保安司令部の西氷庫分室（私はといえば、つねに挨拶代わりになされる殴打を少し受けたりしたが、拷問にあうことはなかった。大体からして、私はそれほどの大物ではなかった）と監房を行き来しながら、軍事裁判を受け、執行猶予で釈放された後、また軍隊に連れて行かれて 2 年 6 か月の兵役を終えて家に戻ると、いつの間にか年齢 30 が目前に迫っていた。

この間の事情は省略しようと思う。他の人々が聞いて、何か物凄い闘士のように思われるのもきまり悪く、呆れたコメディに過ぎない、ささいなハプニングが、途方もない結果を引き起こした事実も恥ずかしく、これまでこの話は妻にも詳しく

話したことはなかった。ただ、人の一生が、遠くに存在するような国家権力によって、呆れたいたずらのように、川の流れに巻き込まれるように、揺れ動いてしまう現実を、私は 20 代に骨身に凍みるほど経験したし、その経験が、その後の私の思惟と研究に大きく影響を及ぼしたことは明白であるということだけは言っておきたい。

除隊して家に戻ったが、大学に戻ることはできなかったし、就職も不可能だった。かろうじて、ある雑誌社の記者として延命していたが、わずか半年もたたないうちに朴正熙が暗殺され、まもなく全斗煥チョン・ドゥファンの新軍部が権力を掌握し、光州での殺戮が繰り返される大激変の時代が始まった。私は朴正熙の死後に断行された赦免によって、1980 年、いわゆる「ソウルの春」の時に大学院に復学した。すべてのものが変わっていた。学生たちとはまったく違う、みすぼらしい身なりの正体不明の青年たちが、キャンパスのあちこちの芝生に寝転がったり、ベンチに斜めにもたれ座って、行き来する学生たちを不気味な目つきで睨みつける奇怪な光景が、私が戻った 1980 年代の大学で初めて目撃した場面であった。

それはあまりにもグロテスクで衝撃的な場面だった。彼らは大学生の反政府デモを阻止するために警察が雇った、俗称「タッポルテ（猛蜂軍団）」と呼ばれるチンピラたち——いわゆるルンペン・プロレタリアート——だったが、キャンパスは学生が半分、彼らが半分だった¹。どこでもデモが起こりそうな兆しが見えれば、警察の合図でこの「タッポルテ」が馳せ参じ、無慈悲な暴行とともに学

¹ 「タッポルテ」、あるいは「ベッコルダン（白骨団）」と呼ばれた彼らは、一般デモを鎮圧する警察とは異なり、白ヘルメットを使ってジーンズユニフォームに棍棒を持ち、デモ隊の中に飛び込んで入って無慈悲な暴行でデモ隊を解散させた。大学キャンパスだけでなく、デモが行なわれる現場であれば、どこでも出動して悪名を馳せたが、記録によると、武術有段者や特戦司令部出身から選抜され、警察の機動部隊として 1990 年代中盤まで運営された。つまり、警察の公式組織だったわけである。しかし、私が目撃したのは、ユニフォームもヘルメットもなくキャンパスのあちこちに散らばり、行き来する学生たちを睨み付けていた、あどけない青年たちだった。おそらく、警察の公式組織になる前に 1、2 年ほど、このような形で運営されたのかもしれない。あるいは、警察官がそのような姿で大学に入り浸り、路地裏のチンピラのように乱暴を働くというのは、とても想像できなかったために、私の脳裏にそのように記憶されたのかもしれない。

生たちを鎮圧するのであった。授業中の教室に催涙弾が飛び込み、ビラを撒こうとして発覚した学生が、「タッポルテ」に血だらけになるまで殴られ、ずるずると引きずられて行くのが、ほとんど日常的に繰り返されていたのが、1980年代の韓国の大学キャンパスであった。世界のどこにも、このような大学キャンパスはかつて存在しなかっただろう。

最も衝撃的なのは、彼らが学生たちと同じ年頃の青年たちだったという点である。私は行き来する学生たちを睨みつけるその青年たちの目つきに、赤々と燃える敵愾心、羨望や劣敗感に満ちた怒り、いつでも合図さえあれば、弾丸のように飛んでいって、あの可愛げなく憎たらしい大学生の連中をひねりつぶしてしまうという、ねじれた欲情にも似た熱気の噴出を目撃しながら、悲しく、絶望的で、恐ろしかった。大学に行くことなど夢にも見ることができない、憐れな下層階級の青年たちを、大学のキャンパスに解き放ち（まるで犬のように！）、警察の後援のもと、思う存分、暴力を行使させる国家権力の低劣さと残忍さに、歯ぎしりするばかりであった。

私の中断された大学院生活は、そのような状況でまた始まった。大学に入学した年度でその人の出身を示す、あまり愉快でない韓国的風習は、1980年代の大学の学生運動から始まったが、これによると、私は1970年度の入学者である。しかし、私はいつも内心では、自身を1980年度の入学者と考えている。1979年の維新政権の没落と1980年のいわゆる「光州事態」を基点に、ある根本的な政治・社会的変化、韓国経済の飛躍的な、あるいは病的な成長にともなう、文化的・知的状況の変化などがあまりにも大きく、私が研究者としての自己意識を明確に持ち、研究といえるようなことをするようになったのも、この時点だったからである。

いい同僚や後輩と数多く出会えたことは、みじめだった時間の中で、それでも享受できた幸運だった。1980年代の全斗煥政権の卒業定員制実施によって、大学の定員が大きく増え、大学院の学生数も以前とは比較できないほど多くなった。各種のセミナーや研究会が大学内外で活発に組織され、聡明さと情熱に満ち溢れた優れた研究者たちと

もに、額を突き合わせて本を読み、韓国社会の現実を討論した時間は今でも懐かしい。昼間はデモに参加して催涙弾の煙の中を飛び回り、夕方はセミナーに参加して発表をするのが、ありふれた日常だった。

1980年代の韓国の人文・社会科学の学界の学問的流れが、韓国社会の変革をめぐる理論的実践に集中したのは、当時の現実から見てあまりにも当然のことだった。たとえば、1985年から始まったいわゆる「社会構成体論」をめぐる激烈な論争は、その代表的なものである。普通の人間には到底付いていけない、マルクス経済理論や革命理論などに、頭が痙攣を起こすほど苦勞しながらも、学問は教壇でなく現場での実践によって（すなわち、いわゆる「政治的正しさ」(political correctness)によって)、その真理や価値が検証されなければならないという確信が、当時の若い研究者たちを導いていたし、私もやはりそうであった。かと思えば、歴史の中でうんざりするほど反復された過度な思想闘争と、その結果としての自害的非難や攻撃、深刻な党派的集団主義も、やはり韓国の1980年代において例外ではなかった（その弊害は現在でも相変らず続いていると私は思う）。

1987年の韓国大統領選挙における民主化勢力の敗北と、その後、進行した世界社会主義の没落は、韓国の知的・学問的構図に空前絶後の激震をもたらした。それをここでみな書き記すことは適切でなく、また私にはそのような能力もない。ただ、自分自身の経験に限って言えば、地震の振動は私にも徐々に、しかしきわめて深く迫ってきた。徐々に、というのは、突然の事態に戸惑い、気がついてどういうことか調べるのに時間がかかったということである。固いと信じていた地面がへこんだ。どこで何が間違っていたのか。言葉は乱舞したが、その筋道はつかめなかった。整理に長い時間がかかった（日本では1992年に出版され、韓国で2年後に翻訳・出版された和田春樹教授の『歴史としての社会主義』を読んで目の前が明るくなった。10年ほど後に、和田先生から直接その本を寄贈される機会があったが、それは奨学金をもらう学生のように気分がよかった）。

そればかりではなかった。他の友人たちはたいしてそうではなかったが、私の目には、ナショナ

リズム、すなわち民族主義、あるいは国家主義というもう一つの廃虚、そして、その廃虚の上で恥も知らず、操り人形のように踊っていた自分自身の姿が、凄惨なほど鮮明に見えた。私にとって、世界の社会主義没落が理念的次元のことだったとすれば、民族主義に対する幻滅は実存的次元の出来事だった。換言すれば、1990年代の韓国の左派知識人たちにとって、現実社会主義に対して客観的な距離をおくことは、進歩的理念を新たに整備し、その実践的座標をまた構想するという点で遅れはしたが、十分に意味のあることだった。

それに比べて、民族主義に対する疑問や問題提起は、まったく次元の異なるものであった。「民族」や「国家」に対して、きわめて素朴な疑問を提起する瞬間、私は親しかった同僚たちから遠ざかり、「右派」、はなはだしくは「親日派」と指摘されるという、呆れた時代を迎えた。はじめは情けなかったが、言葉の力というのは恐ろしいもので、反復され続けるとそれが事実のようになり、ついに自分自身も「本当にそうなのではないか」と混乱するほどになる。私は、残酷な暴力が日常的に強行された1980年代には、まったく感じなかった恐怖、侮辱感、無力感を、民主化が成就したといわれる1990年代以降、今でもひどく感じながら生きている。私がファシズム研究に視線を転じることになったのも、そのような事情とかなり関連がある。

概して1990年代中盤ぐらいから、私は研究者としての自分の実存的根拠であった「国文学」や「国語学」に対する深刻な疑問に直面していた。一つだけ例をあげれば、1973年に刊行されたキム・ヒョンと金允植教授の共著『韓国文学史』がそうである。韓国の近代資本主義は、日本帝国主義によるものではなく、すでに18世紀の朝鮮社会において自生的に芽生えており、それによって韓国の近代文学も、植民地的模倣に依拠したものではなく、固有の民族伝統によって構成されたという、反植民・反封建の民族主体的なナラティブを土台にした本書は、1970年代の代表的な知的資産の一つにちがいないだろう。本書における理論的基盤である、いわゆる「資本主義萌芽論」・「自然発生的近代化論」のナラティブを通じて、私たちの世代は、私たちの親の世代、すなわち日帝治下で教育を受

け成長した世代の「植民史観的」な世界と決別することができた（またはそう信じた）。

私は1980年代から10年以上、この本で学生たちを教え、少しの精神的動揺もなく「民族主体的近代文学史」を説明して、そのような観点で論文を書き続けた。だが、いつからか、この巨大な——しかし意外にもかなり粗雑で粗末な——民族文学史の体系が、なんともいえず退屈でむなく感じられ始めた。私は、四方塞がりの真っ暗な監房、あるいは深い川の底に落ち、もがくような感覚で毎日を送った。数年の間、何も書けなかったし、講義室では、よく口ごもったり、冷や汗が出てくることもあった。このような状態で研究者としての自分を維持できるのか、懷疑せざるを得なかった。

日本語の慣用句の中に「喉から手が出るほど」という、とても実感あふれる表現があるが、ちょうどそのような心情で、私は突破口を探しさまよった。民族主体的な観点での近代文学史をやめて、国文学の成立を制度的・歴史的観点で再読することを主張する論文「〈国文学〉を越えて」(1998年)を発表したが、反応は冷淡なものだった。他の人々はすでに自らの分野で一家を成している40代後半の年齢で、私はまた独学者の心情で新たに始めなければならなかった。ミシェル・フーコーの著作がいつの時よりも魅力的に迫ってきたのは当然だったが、やはり、植民地やナショナリズムの問題に対する渴望を満たすには物足りない面が多かった。紆余曲折の末、韓国でのファシズムの性格や歴史的展開を自らの研究主題として設定し、資料を調べ始めた時、深い川の中から、かろうじて這い上がる瞬間の、息が炸裂するような爽快感を味わった記憶を忘れることはできない。私の研究者としての新たな道程はそうにして始まった。



このあたりで方向を変えなければ、この話がいったいどこに流れるのか私自身も予測できない。ここで『腹／複話術師たち』の執筆背景と関連して、「母語」や「国語」というものが私たちの世代の自我形成にどう介入したかを、主として自分自身の体験を中心に話すことでまとめなければなら

ない。

現代韓国人の民族的自我形成、民族の同質性の構築に最も強力な基盤となってきたのが、いわゆる「国語」であったという事実には、誰も異論がないだろう。すべての国民国家の形成において、「国語」の確立が最も必須であった、世界史的事実を勘案するならば、韓国の国語も、やはりそのような普遍性に符合するとも言えるだろう。しかし、ヨーロッパや中国、あるいはインドのような大陸における、根の深い多言語的状況に比べれば、長い間、狭い半島の空間で閉鎖的な周辺部文化を形成してきた韓国の場合、如何せん相対的な言語的同質性を維持してきた特性があるという点は、また、それなりに認められなければならないだろう。

そのうえ、事態をより一層複雑にしたのは、日本帝国主義による植民地化であった。日本帝国主義の同化政策のもとで、民族語＝朝鮮語は、民族文化の精髓を保存・継承できる唯一の場として認識された。朝鮮語は「植民地状況の中の韓国人にとっては、想像の共同体としての国民国家の役割を果たした」という金允植教授の広く知られた評価は、民族主義の形成にあって、民族語の存在がそのいかなるものより強大であった韓国的特殊性の一端をよく説明している。

1945 年の解放以降に生まれた私たちの世代は、「国語としての日本語」が消滅した社会で成長し、教育を受けた。韓国語の独自性と固有性は、韓国人としての自己のアイデンティティの確立にこのうえなく明らかな根拠であり、世界に唯一無二の文字「ハングル」こそ、民族の伝統文化の偉大な結晶体であることに、疑いの余地はなかった。私たちは、数多くの諸言語を横切って、民族語を身体化することができないまま、「敵の言語に汚染された」私たちの親や先輩の世代とは明確に区別される、言わば「自国語純種世代」だったのである。つまり、私たちは、馴染みある日本語から馴染みのない韓国語へと急激に移動しなければならなかった、私たちの親の世代の言語的トラウマや精神的分裂から自由な世代であった（しかし、それは「自由」というよりは、もうひとつの足枷に過ぎなかったのではないかと、『腹／複話術師たち』を書くことになった契機は、そのような疑問、一

歩進んでそのような足枷から抜け出したいという気持ちから来ていたようである。私たちの親の世代の言語的トラウマに関して、私はすでにいくつかの小文を書いたことがあるので、ここでは詳しい叙述は省略したい）。

日本語や漢字、英語などの外来語で「汚染」された、民族語の純潔性を、生き返らせ保存しなければならないという言語民族主義の衛生学的強迫は、解放以降の韓国における国語教育および日常的な言語実践を支配した。言語をはじめとする文化民族主義のこのような同質性への潔癖症的強迫が、異質・混成的なものに対する深刻な暴力として表現されるのは必然的帰結だが、その諸事例は韓国社会の日常に多く散在している。私の私的ないくつかのエピソードを通じてこの問題について見てみたい。

1970 年代中盤に、私の叔父の家族はアメリカに移民した。すべての移民家族が体験する典型的な苦労のすえ、叔父と叔母は故郷に一度も戻らずにアメリカで亡くなり、韓国を離れる時、子供だった私の年下のいとこは、立派に成長してアメリカの名門大学の学生になって、1990 年代初めに夏休みを迎えて初めてソウルを訪問した。一家や親戚が集まって、いところを歓迎する楽しく質素な宴を持ったが、ただつらかったのは、すでに老人になった目上の人たちと話が通じないということだった。そのようなことはあっても、親戚たちはいとこの幼い時の韓国名を呼んで、温かく親族の情を示していた。

ただ一人だけが例外だった。日帝植民地時代に立派な高校と立派な大学を卒業した、尊敬すべきこの親戚は、いところが韓国語でコミュニケーションできないという事実を声高に嘆き、ついには彼にきちんと韓国語教育を施さなかった叔父や叔母を非難するまでに至った。そして、きっと韓国語を学び、次に会う時には、自分と韓国語で対話できるようにしなさい、そうでなければ二度と韓国に戻って来るな、と峻厳に述べ、英語ができる親戚にその話を伝えさせた。彼が韓国語で話した言葉をいところが理解できなかったのは、まだ幸いとも言えたが、私は、いつも尊敬していたその親戚に、かなり失望しただけでなく、「いくら生活が苦しくても、自分の国の言葉は教えておかなければ

ならない」という非難にいたっては、我慢できずに軽い言い争いになってしまった。

楽しく和気藹々とした席だっただけに、幸い大事にはならなかったが、私はその親戚とも関連した、ある場面を思い出しながら、複雑で息苦しい気持ちを禁じ得なかった。私の父は、北側から 38 度線を越えてやってきた貧しい公務員だったが、やはり貧しく孤独だったいくつにもならない父の兄弟とその家族たちは、盆と正月になれば狭い我が家に集まり、数日泊まって遊んで行ったりした。一家や親戚が集まって騒々しく笑って騒いだ、あの日々は、私の少年期の最も美しい思い出の一つでもある。大人たちは酒を飲んで興が乗ると歌を歌ったが、その時、彼らが歌ったのは日本の流行歌だった。私は自分の母が、普段は見ることのできない妙なポーズと声で、聞き取れないはずの日本の歌を歌う姿を、やはり理解できない気持ちで眺めたりした。そうするうちに、ある瞬間、彼らは突然、すべて日本語で騒ぎ始めるのである。それはありふれた日常だったし、私はそのような行動の持つ意味がわかるような年齢ではなかった。ただ、私は彼らが家の外に出れば、絶対にそのようなことはしないということには気付いていた。

幼少時に両親について移民し、韓国語を忘れたまま故郷に戻ってきた、いとこを叱責する親戚の態度——事実、そのような場面は、韓国社会のどこでもよく見られる光景でもあった——が、私をもどかしくしたのは、その頑強な「国語中心主義」というよりは、上の場面に見られるように、その理念の下に隠された、ある種の分裂的無意識、限らない自己欺瞞、優越感で包まれた深いコンプレックスのようなものだった。私の中で少しずつ育っていた「国語」や「国文学」に対する懐疑は、日常におけるこのようなことを体験しながら、より一層大きくなっていった。

その親戚たちと似たような年配の、大学生の時期の師匠たちが、みな日本語を母国語のように駆使するという事実、驚きながら気付いたのもそのころであった。驚くべき事実ではまったくないにもかかわらず、驚いたのは、本来、彼らに近く接して話を交わした 1970 年代には、まったくその事実を意識できなかったからである。植民地で教育を受けた世代にとって、自らの知的な起源が日

本と日本語にあるという事実は、自分自身にも他人にも徹底的に隠蔽されていた。日本と日本語は、公的空間で発話できないものだった。つまり、公的には憎しみ・攻撃・嫌悪の対象になって遮断され、私的には意図的な忘却を通じて無意識の底に潜んでしまうのが日本と日本語であった。ポストコロニアルの韓国社会における「国語」および「国文学」は、そのような忘却を土台にした憐れな自己欺瞞、あるいは「しらを切る」努力の上に立っているものと、私の目には映った。

解放以降の世代であっても事情は変わらなかった。解放以前の親の世代が、自らの身体と精神に刻まれた植民地に対する「しら切り」で植民地の記憶を埋めてしまったとすれば、解放以降の子供の世代は「あえてしらを切る必要もなく」、植民地と絶縁して忘却した。そしてその忘却の結果、ポストコロニアルの韓国社会における一般的な植民地理解は、憎しみ・怨恨・軽蔑・嘲弄・侮蔑・無視・無知などの、極端で一次元的な感情を離れては、不可能なものとなった。

植民主義の最大の罪悪はここにあると私は考える。つまり、植民主義はその支配を受けた者（そしてその子孫たち）にとって、植民地的枠組を越える世界に対する想像を基本的に剥奪することによって、その支配を永続化する。その典型的な例が、植民地の歴史を、日帝に対する抵抗か、協力かというなどの低劣で幼稚このうえない、メロドラマ的二分法で説明する一切の言説であろう。そのような類の暴力的言説と、それを土台にした知的・文化的産物が猛烈な威力を行使する韓国社会の現実に、私は絶えず絶望したし、今でもそうである。私を取るに足りない小文を書いてきたのは、その絶望と闘ってきた痕跡であると思うが、しかし、闘いで敗れたのも、いつも私の側だった。



私が国語学者・崔鉉培^{チエ・ヒョンベ}（1894～1970 年）に関する論文を書き始めたのは、概して上のような考えからであり、その時期は、『腹／複話術師たち』の各章を、国立国語院の機関誌『新しい国語生活』に連載し始めた 2004 年前後であった。

韓国の民族主義の歴史において、崔鉉培と朝鮮

語学会は、いわゆる抵抗民族主義の苦難と威厳を象徴する一つの記号である。いや記号というよりは、むしろ一つの神話である。広く知られている通り、韓国の民族主義は、崔鉉培を中心にしたハングル運動において、民族抵抗の最高峰の内容と形式を発見した。日本帝国主義の類例なき「同化政策」と「民族語抹殺政策」に対抗した朝鮮語学会のハングル研究こそ、民族精神を守護する最後の砦であり、二人の獄死者を出した末、1945年8月15日の日帝の崩壊とともに監獄の門を出た、朝鮮語学会事件（1942年）の被疑者たちこそ、民族苦難の大叙事詩を完結させるクライマックスの主人公に違いなかった。崔鉉培と彼の同志たちが達成した超人的な業績と闘争の歴史は、ポストコロニアル国家の自負心の源泉として絶えず叙述され再生産された。そして私たちの世代は、その英雄譚の圧倒的な影響の下で成長した。

しかし、一般的な通念とは異なり、崔鉉培を中心にした朝鮮語学会が、朝鮮語学会事件以前までは、朝鮮総督府とほとんど対立することのない非敵対的な関係を維持しただけでなく、1938年以降、朝鮮語廃止と「国語常用」政策が施行される期間にも沈黙を守ったという事実、同時に機関誌『ハングル』に他の雑誌では見られない「新年奉祝辞」を毎年1月号に掲載し、「国民精神総動員「銃後報国強調週間」について」（1938年）や「第36回海軍記念日を迎えるということ」（1941年）のような記事を通じて、露骨な戦争協力行為をしていた事実などはきれいに忘却された。

問題は、『ハングル』誌が、このような内容を掲載したという事実自体でなく、この内容が解放後に出た『ハングル』誌の影印本ですべて削除されているという点である。朝鮮語学会を受け継いだ「ハングル学会」が、1972年に『ハングル学会 50年史』を刊行しながら、その巻頭言で次のように語っているのをどう理解すべきだろうか？

ハングル学会の創立精神は…（中略）…民族精神を破壊しようとする侵略者の魔の手から、民族を守ろうとしたところに根本的な目的があった。…（中略）…日本帝国主義の侵略者らは…（中略）…私たち民族を間抜けな案山子に作り上げ、この「魂」を抜き取るために、

彼らは私たちの歴史を歪曲し、私たちの言葉や文字をなくそうとまでしたのである。恐ろしい悪魔たちであった。この悪魔たちの手から民族の精神と文化を守るべく、言葉や文字の保存、研究、発展のために創立されたのがハングル学会である。したがって、ハングル学会の歴史は、日帝に対する武器なき闘争であった²。

「新春をお迎えになり、天皇、皇后両陛下におかれましては、御機嫌麗しく」「皇軍の威武と国家興隆の気運が加えられることを祈願申し上げます」（原文朝鮮語）³という発言の記憶を消去し、その忘却の場の上に「悪魔の魔の手から民族の精神を守るために闘争を行った」という自画像を嵌め込むこの無意識！このようなことこそを問題にすべきである。この無意識こそ、植民地の歴史（history）を遮り、それを「歴史」（History）で対峙させ、ポストコロニアル社会を自閉的ナルシズムの世界へと駆り立てる原動力だからである。

また、崔鉉培の言語観や言語学の知識のほとんどすべてが、日本の国粋主義言語学者・山田孝雄（1875～1958年）のものをそのまま「引き写す」水準のものであったという事実が、学界でほとんど議論すらされず、一般にはほとんど知らされなかったということも、やはりそのような無意識を背景とするものであろう⁴。

しかし、その隠蔽を剥いで、民族主義者の恥部を暴露することが私の目的であったかといえ、そういうことでは決してなかったという点をまず明確にしておく必要がある。植民地における近代的知識生産が、植民地宗主国に全面的に依存せざるを得ないというのは当然のことである。問題は、帝国主義の抑圧から自らを保存するために握りしめた、その「解放」と「抵抗」の道具が、実は「敵」のものであるという現実によって、植民地民族主

² ハングル学会『ハングル学会 50年史』（1971年）、1頁。

³ 朝鮮語学会「謹奉賀新年」『ハングル』第7冊第1号（1939年1月）。

⁴ 高永根教授の『崔鉉培の学問と思想』（集文堂、1995年）は819ページにも達する膨大な力作だが、この中で山田孝雄に関しては、「多くの影響」あるいは「交渉関係」という用語のもと、わずか8ページの分量で叙述されている。

義の運命は、つねに深刻な矛盾と分裂の危険の前に晒されざるを得ないということ、そのことを直視してはじめて、被植民者の真の解放は開かれ得るという点である。喩えていうならば、それは、刀の柄でなく刃をとらえて敵と戦うことなのである。どうやって自らを切らずに相手を超えられるだろうか？ 被植民者のいわゆる「真似」(mimicry)が、植民者を転覆し新たな創造につながる道は、少なくともこの二重性に対する自覚、この矛盾に対して、骨を削るような自己省察なしには開かれ得ないだろうものであった。

しかし、ポストコロニアル社会の韓国の民族言説が行なったのは、その苦境に対する自覚でも、苦痛に満ちた直視でもなく、それを隠し、急いで忘却するということだった。受難の抵抗史が、燦爛たる光輝に包まれ、全面化される裏面で、「敵との同床」を通じて近代を企画しなければならなかった運命の凄まじさは簡単に忘却され、それ以上、思惟されることもなかった。崔鉉培自らがそのように行動したし、民族言説も、やはり輝かしい英雄譚で包まれたこの闘士に、自らを投射し、そのことで自らの自画像とみなした。韓国の民族主義は、そのように崔鉉培を専有し、そのように自らを欺瞞し忘却した。

上のような主張を土台に、崔鉉培について書いた論文で私が最も力説したかったのは、次のようなことであった。

この欺瞞と忘却の後に来るのは、前の「ハングル学会 50 年史」におけるものと同様の激烈な「憎しみ」である。しかし「悪魔」「敵の魔の手」「不俱戴天の敵」などのような憎しみだけが、「敵」を形容する唯一の言語になる時、「敵」の姿は決して現れない。植民者に対する被植民者の憎しみは、植民主義の終息のためにいかなる機能も果たすことはできない。憎しみは、被植民者にとって何が本当の敵なのか、何が意味ある抵抗なのかに対する、一切の思考を遮断する。そればかりか、ある対象に対する深い憎しみは、必ずやその対象に対する深い依存を産むという点で、憎しみは植民主義の立派な滋養である。憎悪すればするほど、憎しみの対象は「私」の存在理由に

ならなければならないからである。結局、被植民者は、植民者に対する憎しみを通じて、それに依存することになる。そうする限り、彼は決して「敵」の正体を見据えることができず、したがっていかなる抵抗もできない。植民者の手から脱け出すために、被植民者は、まず憎しみを越える方法を知らなければならない。しかし、憎しみを語り、憎しみを教えたこと以外に、はたしてポストコロニアル社会の韓国の民族言説がやってきたのは何だっただろうか？⁵

分量もかなり長く、執筆に時間もかかったこの論文に対する韓国の学界の反応は、やはり完全な無関心であった。別に期待もしていなかったのも、特に気にもしなかった。ただ、私がこの論文を書きながら大きく参考にした、東京大学の三ッ井崇氏が、彼の著書『朝鮮植民地支配と言語』(明石書店、2010 年)で多くの紙幅を割いて、私の論文に対して詳細に言及しながら、また痛切な批判をしてくれたことが大きく激励ともなった。

私には、崔鉉培の思想と実践こそ、韓国の言語民族主義の矛盾と自己欺瞞を一目で集約して示す、生きた事例であった。妙に聞こえるかもしれないが、この論文を書く間、私は、崔鉉培先生を近くで実際に目撃するような感覚にしばしば襲われ、彼に訊ねたいことが数多くあった。この論文を書かなかったならば、思い出すはずもなかった、ある場面も、しばしば思い出したりした。その場面は、たとえばこのようなものである。

大学に入学してまだ 1 か月にもならない頃、私は学科の先輩たちが黒い喪に服し、白い手袋をしたまま、キャンパスを忙しく走っていく姿に遭遇した。「崔鉉培教授葬礼式」に行事要員として動員された学生たちだった。崔鉉培の葬儀は、1970 年 3 月 27 日、ソウルの延世大学校大講堂で、国務総理をはじめとする三府の要人が参加するなか、「社会葬」として執り行われた。「偉大な民族の師匠」

⁵ 拙稿「更生の道あるいは迷路——崔鉉培の「朝鮮民族更生の道」を中心に」『植民地を抱いて』(図書出版ヨンナク、2009 年)。この小文の日本語翻訳は、宮嶋博史・金容徳篇『近代交流史と相互認識 III』(慶応義塾大学出版会、2006 年)、あるいは拙著『抵抗と絶望——植民地朝鮮の記憶を問う』(大月書店、2015 年)にも収録されている。

であり「不屈の闘士」であるハングル学者・崔鉉培先生の死を哀悼する、キャンパス全体に鳴り響く壮厳で厳粛な雰囲気と、戸惑うような畏敬の念を抱いて、それを眺めていた、新入生の若造たちの姿が同時に思い浮ぶ。

それから 30 年も過ぎ、私が崔鉉培に関する非常に挑発的な（ある人々が見れば、容赦できず非礼な）論文を書くことになるとは、もちろんまったく想像できなかった。普段は一度も注視しなかった、文科大学の建物の前の崔鉉培先生の胸像や、あるいは教授会議室の壁にかかっている古くなった彼の白黒写真を眺めて、私はときおり、なかなか解けないさまざまな諸問題を、彼に訊ねるように一人で考えたりした。彼の胸像や写真は答えてくれない。しかし、ひょっとしたら、私に聞こえなかっただけなのかもしれない。



被植民者として生きるということ、または、被植民者の後裔として植民地を記憶するということとはどのようなことだろうか、私は研究の道に入って以降、これまで数十年の間、その問題を考え、そのことに関するあまり十分でない論文を書いてきたが、相変らず五里霧中で先も見えず真っ暗である。一時は明らかになったと思ったことなども、日が進むにつれてくもっていき、今となってはわからないことだらけである。

ただ、こうしてはいけないということだけは、ますます明らかになる。先にも触れたように、憎しみと怨恨だけで固まった記憶の方式では、植民地は決して終息しない。しかし、韓国社会の日常の中で、一歩進んで、知的・学問的領域においても、事態がよくなる兆しは少しも見られない。それでも落胆ばかりしているわけにもいかない。「韓国語」や「韓国文学」は、韓国人の私にとって「外国語」であり「外国文学」であるということ、またはそのように作るべきものであると私は信じる。政治的環境の変化と関係なく、日々強化される韓国社会の国家主義、ショービニズム、集団ナルシズム的な暴力に対抗して、韓国人として私ができることは、韓国から韓国に「亡命」すること、韓国から韓国に「移民」すること、すなわち韓国内

の「難民」になることだと私はいつも考える。そのことが、韓国語と韓国文学が、私にとっては外国語であり外国文学だという意味である。

私、そしてあなたの母国語は、すべて外国語でありクレオールである。私は、そしてあなたは、単に過去の痕跡に過ぎず、過去は、私が、そしてあなたがわからない他者である。私、そしてあなたは、肉体的にも精神的にも混血人である。私、そしてあなたの文化は、雑種であり植民地的である。いわゆる植民主義の克服、「植民残滓の清算」は、この地点においてのみ可能であると私は信じる。なにかを読み、ものを書く者としての私の義務もここから始まる。

私は今、中国の南京でこの小文を書いている。今晚も、町内の果物屋のおばさんは、私の情けない中国語の声調を熱心に矯正してくれた。帰り道に路地で遊ぶ子供たちがはしゃぐ声をじっと聞きながら、私はその子供の言葉を真似てみようとな努力した。あの字はどう読むのだろうか、どんな意味だろうか、通りの看板を眺める私の目はあわただしい。「三人行必有我師」（論語・述而篇）でなく「天地到处有我師」である。この不慣れた言葉の森で、私の目と耳は、他者と出会うために全力を尽くす。母国語の世界では必要ない、この努力こそ、言語が倫理でもある／でなければならない最も確実な根拠ではないだろうか。そしてそのことこそ、あのおぞましいモダニティ、残忍な植民地を超える、有力な一つの通路ではないだろうか。

……開いた窓のすきまから、南京の名物・桂花の香りが、しばらく夢のかけらのように広がって消える。よし。今日一日はこれで十分、幸せである。

（中国・南京にて、2017 年 9 月 30 日）

（訳＝渡辺直紀）